武蔵野日曜聖書講筵

パウロの弁明
――使徒行伝第21～23章――

１９９１年11月30日
小池辰雄

死の覚悟　エルサレムに上る　聖書は大ドラマ　パウロの弁明　大いなる光の霊撃　聖霊のバプテスマ　異邦伝道　議会での弁明　ローマへ護送　天国は幼児のごとき者の国

【使徒21】

1ここに我ら人々と別れて船出をなし、真直にはせてコスに到り、次の日ロドスにつき、彼処よりパタラにわたる。2此の処にてピニケにゆく船に遇い、これに乗りて船出す。3クプロを望み、之を左にして過ぎ、シリヤに向かいて進み、ツロに著きたり、此処にて船荷を卸さんとすればなり。4斯て弟子たちに尋ね逢いて七日留まれり。かれら御霊によりてパウロに、エルサレムに上るまじき事を云えり。5然るに我ら七日終りて後、いでて旅立ちたれば、彼等みな妻子とともに町の外まで送りきたり、諸共に浜辺に跪づきて祈り、6相互いに別を告げて我らは船に乗り、彼らは家に帰れり。

7ツロをいでトレマイに到りて船路つきたり。此処にて兄弟たちの安否を訪い、かれらの許に一日留まり、8明くる日ここを去りてカイザリヤにいたり、伝道者ピリポの家に入りて留まる、彼はかの七人の一人なり。9この人に預言する四人の娘ありて、処女なりき。10我ら数日留まり居るうちに、アガボと云う預言者、ユダヤより下り、11我らの許に来りてパウロの帯をとり、己が足と手とを縛りて言う『聖霊かく言い給う「エルサレムにて、ユダヤ人、この帯の主を斯の如く縛りて異邦人の手に付さん」と』12われら之を聞きて此の地の人々とともにパウロに、エルサレムに上らざらんことを勧む。13その時パウロ答う『なんじら何ぞ歎きて我が心を挫くか、我エルサレムにて、主イエスの名のために、唯に縛らるるのみかは、死ぬることも覚悟せり』14斯く我らの勧告を納れぬによりて『主の御意の如くなれかし』と言いて止む。

15この後われら行李を整えてエルサレムに上る。16カイザリヤに居る弟子も数人、ともに往き、我らの宿らんとするクプロ人マナソンという旧き弟子のもとに案内したり。

17エルサレムに到りたれば、兄弟たち歓びて我らを迎えたり。18翌日パウロ

我らと共にヤコブの許に往きしに、長老たち皆あつまり居たり。19パウロその安否を問いて後、おのが勤労によりて異邦人のうちに、神の行い給いしことを、一々告げたれば、20彼ら聞きて神を崇め、またパウロに言う『兄弟よ、なんじの見る如くユダヤ人のうち、信者となりたるもの数万人あり、みな律法に対して熱心なる者なり。21彼らは、汝が異邦人のうちに居る凡てのユダヤ人に対いて、その兒らに割礼を施すな、習慣に従うなと云いて、モーセに遠ざかることを教うと聞けり。22如何にすべきか、彼らは必ず汝の来りたるを聞かん。23されば汝われらの言う如くせよ、我らの中に誓願あるもの四人あり、24汝かれらと組みて之とともに潔をなし、彼等のために費を出して髪を剃らしめよ。さらば人々みな汝につきて聞きたることの虚偽にして、汝も律法を守りて正しく歩み居ることを知らん。25異邦人の信者となりたる者につきては、我ら既に書き贈りて、偶像に献げたる物と、血と、絞殺したる物と、淫行とに遠ざかるべき事を定めたり』26ここにパウロその人々と組みて、次の日ともどもに潔をなして宮に入り、潔の期満ちて各人のために献物をささぐべき日を告げたり。

27斯て七日の終らんとする時、アジヤより来りしユダヤ人ら、宮の内にパウロの居るを見て群衆を騒がし、かれに手をかけ、叫びて言う、28『イスラエルの人々助けよ、この人はいたる処にて民と律法と此の所とに悖れることを人々に教うる者なり。然のみならずギリシヤ人を宮に率き入れて此の聖なる所をも汚したり』29かれら曩にエペソ人トロピモが、パウロとともに市中にいたるを見て、パウロ之を宮に牽き入れしと思いしなり。30ここに市中みな騒ぎたち、民ども馳せ集り、パウロを捕えて宮の外に曳出せり、斯て門は直ちに鎖されたり。31彼らパウロを殺さんと為しとき、軍隊の千卒長に、エルサレム中さわぎ立てりとの事きこえたれば、32かれ速かに兵卒および百卒長らを率いて馳せ下る。かれら千卒長と兵卒とを見て、パウロを打つことを止む。33千卒長、近よりてパウロを執え、命じて二つの鎖にて繋がせ、その何人なるか、何事をなしたるかを尋ぬるに、34群衆の中にて或者はこの事を、或者はかの事を呼ばわり、騒乱のために確かなる事を知るに由なく、命じて陣営に曳き来らしめたり。35階段に至れるに、群衆の手暴きによりて、兵卒パウロを負いたり。36これ群れる民ども『彼を除け』と叫びつつ随い迫れる故なり。

37パウロ陣営に曳き入れられんと為るとき、千卒長に言う『われ汝に語りて可きか』かれ言う『なんじギリシヤ語を知るか。38汝はかのエジプト人にして、さきに乱を起こして四千人の刺客を荒野に率い出でし者ならずや』39

パウロ言う『我はキリキヤなるタルソのユダヤ人、卑しからぬ市の市民なり。請う民に語るを許せ』40之を許したれば、パウロ階段の上に立ち、民に対いて手を揺し、大いに静まれる時、ヘブルの語にて語りて言う、

【使徒22】

1『兄弟たちよ親たちよ、今なんじらに対する弁明を聴け』2人々そのヘブルの語を語るを聞きてますます静かになりたれば、又いう、3『我はユダヤ人にてキリキヤのタルソに生まれしが、此の都にて育てられ、ガマリエルの足下にて先祖たちの律法の厳しき方に遵いて教えられ、今日の汝らのごとく神に対して熱心なる者なりき。4我この道を迫害し男女を縛りて獄に入れ、死にまで至らしめしことは、5大祭司も凡ての長老も我に就きて証するなり。我は彼等より兄弟たちへの書を受けて、ダマスコに寓り居る者どもを縛り、エルサレムに曳き来りて罰を受けしめんとて彼処にゆけり。6往きてダマスコに近づきたるに、正午ごろ忽ち大いなる光、天より出でて我を環り照せり。7その時われ地に倒れ、かつ我に語りて「サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか」という声を聞き、8「主よ、なんじは誰ぞ」と答えしに「われは汝が迫害するナザレのイエスなり」と言い給えり。9偕に居る者ども光は見しが、我に語る者の声は聞かざりき。10われ復いう「主よ、我なにを為すべきか」主いい給う「起ちてダマスコに往け、なんじの為すべき定まりたる事は彼処にて悉とく告げらるべし」11我は、かの光の晃耀にて目見えずなりたれば、偕におる者に手を引かれてダマスコに入りたり。12ここに律法に拠れる敬虔の人にして其の町に住む凡てのユダヤ人に令聞あるアナニヤという者あり。13彼われに来り傍らに立ちて「兄弟サウロよ、見ることを得よ」と言いたれば、その時、仰ぎて彼を見たり。14かれ又いう「我らの先祖の神は、なんじを選びて御意を知らしめ、又かの義人（キリスト）を見、その御口の声を聞かしめんと為し給えり。15これは汝の見聞したる事につきて、凡ての人に対し彼の証人とならん為なり。16今なんぞ躊躇うか、起て、その御名を呼び、バプテスマを受けて汝の罪を洗い去れ」17斯て我エルサレムに帰り、宮にて祈りおるとき、我を忘れし心地して主を見奉るに、我に斯く言い給う、18「なんじ急げ、早くエルサレムを去れ、人々われに係る汝の証を受けぬ故なり」19我いう「主よ、我さきに汝を信ずる者を獄に入れ、諸会堂にて之を打ち、20又なんじの証人ステパノの血の流されしとき、我もその傍らに立ちて之を可しとし、殺す者どもの衣を守りしことは、彼らの知る所なり」21われに言い給う「往け、我なんじを遠く異邦人に遣すなり」と』

22人々きき居たりしが此の言に及び、声を揚げて言う『斯のごとき者をば

地より除け、生かしおくべき者ならず』23斯く叫びつつ其の衣を脱ぎすて、塵を空中に撒きたれば、24千卒長、人々が何故パウロにむかいて斯く叫び呼わるかを知らんとし、鞭ち訊ることを命じて、彼を陣営に曳き入れしむ。25革鞭をあてんとてパウロを引き張りし時、かれ傍らに立つ百卒長に言う『ロマ人たる者を罪も定めずして鞭つは可きか』26百卒長これを聞きて千卒長に往き、告げて言う『なんじ何をなさんとするか、此の人はロマ人なり』27千卒長、きたりて言う『なんじはロマ人なるか、我に告げよ』かれ言う『然り』28千卒長こたう『我は多くの金をもて此の民籍を得たり』パウロ言う『我は生まれながらなり』29ここに訊べんとせし者どもは直ちに去り、千卒長はそのロマ人なるを知り、之を縛りしことを懼れたり。

30明くる日、千卒長かれが何故ユダヤ人に訴えられしか、確なる事を知らんと欲して彼の縛を解き、命じて祭司長らと全議会とを呼び集め、パウロを曳き出して其の前に立たしめたり。

【使徒23】

1パウロ議会に目を注ぎて言う『兄弟たちよ、我は今日に至るまで事毎に良心に従いて神に事えたり』2大祭司アナニヤ傍らに立つ者どもに、彼の口を撃つことを命ず。3ここにパウロ言う『白く塗りたる壁よ、神なんじを撃ち給わん、なんじ律法によりて我を審くために坐しながら、律法に悖りて我を撃つことを命ずるか』4傍らに立つ者いう『なんじ神の大祭司を罵るか』5パウロ言う『兄弟たちよ、我その大祭司たることを知らざりき。録して「なんじの民の司をそしる可からず」とあればなり』6斯てパウロ、その一部はサドカイ人、その一部はパリサイ人たるを知りて、議会のうちに呼ばわりて言う『兄弟たちよ、我はパリサイ人にしてパリサイ人の子なり、我は死人の甦えることの希望につきて審かるるなり』7斯く言いしに因りて、パリサイ人とサドカイ人との間に紛争おこりて、会衆相分れたり。8サドカイ人は復活もなく御使も霊もなしと言い、パリサイ人は両ながらありと云う。9遂に大いなる喧騒となりてパリサイ人の中の学者数人、たちて争いて言う『われら此の人に悪しき事あるを見ず、もし霊または御使、かれに語りたるならば如何』10紛争いよいよ激しく為りたれば、千卒長、パウロの彼らに引裂れんことを恐れ、兵卒どもに命じて下りゆかしめ、彼らの中より引取りて陣営に連れ来らしめたり。

11その夜、主パウロの傍らに立ちて言い給う『雄々しかれ、汝エルサレムにて我につきて証をなしたる如く、ロマにても証をなすべし』

12夜明になりてユダヤ人、徒党を組み、盟約を立てて、パウロを殺すまでは飲食せじと言う。13この徒党を結びたる者は四十人余なり。14彼らは祭司長・長老らに往きて言う『われらパウロを殺すまでは何をも味うまじと堅く盟約を立てたり。15されば汝等なお詳細に訊べんとする状して、彼を汝らの許に連れ下らすことを議会とともに千卒長に訴えよ。我等その近くならぬ間に殺す準備をなせり』16パウロの姉妹の子この待伏の事をきき、往きて陣営に入り、パウロに告げたれば、17パウロ百卒長の一人を呼びて言う『この若者を千卒長につれ往け、告ぐる事あり』18百卒長これを携え、千卒長に至りて言う『囚人パウロ、我を呼びて、この若者なんじに言うべき事ありとて、汝に連れ往くことを請えり』19千卒長その手を執り退きて、私に問う『われに告ぐる事とは何ぞ』20若者いう『ユダヤ人は汝がパウロの事をなお詳細に訊ぶる為にとて明日かれを議会に連れ下ることを汝に請わんと、申し合わせたり。21汝その請に従うな、彼らの中にて四十人余の者、パウロを待伏せ、之を殺すまでは飲食せじと盟約を立て、今その準備をなして汝の許諾を待てり』22ここに千卒長、若者に『これらの事を我に訴えたりと誰にも語るな』と命じて帰せり。23さて百卒長を両三人よびて言う『今夜、九時ごろカイザリヤに向けて往くために、兵卒二百、騎兵七十、槍をとる者二百を整えよ』24また畜を備え、パウロを乗せて安全に総督ペリクスの許に護送することを命じ、25かつ左のごとき書をかき贈る。

26『クラウデオ・ルシヤ謹みて総督ペリクス閣下の平安を祈る。27この人はユダヤ人に捕えられて殺されんとせしを、我そのロマ人なるを聞き、兵卒どもを率い往きて救えり。28ユダヤ人の彼を訴うる理由を知らんと欲して、その議会に引き往きたるに、29彼らの律法の問題につき訴えられたるにて、死もしくは縛に当たる罪の訴訟にあらざるを知りたり。30又この人を害せんとする謀計ありと我に聞こえたれば、われ俄にこれを汝のもとに送り、これを訴うる者に、なんじの前にて彼を訴えんことを命じたり』

31ここに兵卒ども命ぜられたる如くパウロを受けとりて、夜中アンテパトリスまで連れゆき、32翌日これを騎兵に委ね、ともに往かしめて陣営に帰れり。33騎兵はカイザリヤに入り、総督に書をわたし、パウロを其の前に立たしむ。34総督、書を読みて、パウロのいずこの国の者なるかを問い、そのキリキヤ人なるを知りて、35『汝を訴うる者の来らんとき、尚つまびらかに汝のことを聴かん』と言い、かつ命じて、ヘロデの官邸に之を守らしめたり。

●死の覚悟

第三次伝道の終りの方のところです。これは旅でありますが。21章です。

1ここに我ら人々と別れて船出をなし、真直にはせてコスに到り、次の日ロドスにつき、彼処よりパタラにわたる。2此の処にてピニケにゆく船に遇い、これに乗りて船出す。3クプロを望み、之を左にして過ぎ、シリヤに向かいて進み、ツロに著きたり、此処にて船荷を卸さんとすればなり。4斯て弟子たちに尋ね逢いて七日留まれり。かれら御霊によりてパウロに、エルサレムに上るまじき事を云えり。

「もう危ないから、よしなさい」と、彼らの気持は――同じ御霊によっても、愛の上から彼に、危ないからよせと――これも本当なんだ、決して間違ってない。パウロは、また、それをもうひとつ次元の違った御霊の世界から、「ダメだ、私は行くんだ」と、こういうわけです。

5然るに我ら七日終りて後、いでて旅立ちたれば、彼等みな妻子とともに町の外まで送りきたり、諸共に浜辺に跪づきて祈り、6相互いに別れを告げて我らは船に乗り、彼らは家に帰れり。

7ツロをいでトレマイに到りて船路つきたり。此処にて兄弟たちの安否を訪い、かれらの許に一日留まり、8明くる日ここを去りてカイザリヤにいたり、伝道者ピリポの家に入りて留まる、彼はかの七人の一人なり。

ピリポというのは非常に霊的なカリスマの強い伝道者です。見えなくなって、どこかへ行ってしまったと思ったら、別な町へ行ってしまっている。大変なことですから、この頃のご連中は。ピリポは選びの七人の一人です。使徒行伝の6章に出ている。

「3然れば兄弟よ、汝らの中より御霊と智慧とにて満ちたる令聞ある者七人を見出せ、それに此の事を掌どらせん。4我らは専ら祈をなすことと御言に事うることとを務めん』5集まれる凡ての者この言を善しとし、信仰と聖霊とに満ちたるステパノ及びピリポ、プロコロ、ニカノル、テモン、バルメナ、またアンテオケの改宗者ニコラオを選びて、6使徒たちの前に立てたれば、使徒たち祈りて手をその上に按けり。」（使徒6・3～5）

ステパノ及びピリポ、この二人が七人の中でも非常に著しい二人であった。

9この人に預言する四人の娘ありて、処女なりき。

だから、ピリポというのは、娘さんたちも凄いんだよな。四人とも非常にカリスマ的な人だ。

10我ら数日留まり居るうちに、アガボと云う預言者、ユダヤより下り、

アガボは、11章に出ている。

11我らの許に来りてパウロの帯をとり、己が足と手とを縛りて言う『聖霊かく言い給う「エルサレムにて、ユダヤ人、この帯の主を斯の如く縛りて異邦人の手に付さん」と』

そうなりますよと。それは、後で本当にとっ捕まってしまった。

12**われら之を聞きて此の地の人々とともにパウロに、エルサレムに上らざらんことを勧む。**13**その時パウロ答う『なんじら何ぞ歎きて我が心を挫(くじ)くか、**

キリストが「十字架にかかりに行く」と言ったら、ペテロが袖引きとめて、「ダメですよ」と言ったら、

「サタンよ、退け！」

とキリストは言われた。あれ式に、このパウロが、

「ダメだ、私はもう死を覚悟している」と。

我エルサレムにて、主イエスの名のために、

「名のために」というのは、まず「名に在って」でなければ、本当の「名のために」はできない。「キリストの名の中で」。「名に在って」ということは「名の中で」ということ。「エン」「イン」という字を使いますから。ペテロが跛者に、

「イエスの名の中で歩け」

と言った。「名によりて」とよく訳してあるが、「よりて」ではない。「名の中で歩め」ということです。

「エン　オノマトー　イエスー」（イエスの名の中で）です。我々も、そういう、キリストの名の中にあるような在り方にならないと、本当の力は来ない。「名の中で」と、私は大胆に訳す。「名の中に」いると、今度は、「名のために」という目的ができるわけです、力が来るから。「中に」いないで、「ために」なんて言ったって、それはダメなんだ。

唯(ただ)に縛らるるのみかは、死ぬことをも覚悟せり』

縛られて結構だと。

「死ぬるも生きるもただキリストだ」

と、パウロがピリピ書で言っているとおり。

14**斯く我らの勧告(すすめ)を納(い)れぬによりて『主の御意(みこころ)の如くなれかし』と言いて止む。**

「じゃぁもう、御意に任せるから、しょうがない」

と。この21章の9節以下のこの一段は非常に著しい問答ですね。

●エルサレムに上る

まだ、パウロは死ぬには惜しい人だ。だから、聖霊はそうやって助けようと思っている。けれども、

「いつだか知らないけれども、とにかく、自分はキリストの名の為には生命を捨てるんだ」

と。とうとうローマでもってそういうことになる。

15 **この後われら行李を整えてエルサレムに上る。16カイザリヤに居る弟子も**
数人、ともに往き、我らの宿らんとするクプロ人マナソンという旧き弟子の
もとに案内したり。

マナソンというのは、ステパノの殉教の頃にいた弟子の一人です。

17 **エルサレムに到りたれば、兄弟たち歓びて我らを迎えたり。**

「兄弟たち」とは、信仰の兄弟の意味です。エルサレム本山だからね。だけれども、彼らは――ペテロやなんかはいいんですけれども――なかには、律法から離れないようなのが大分いるんだよな、ユダヤ人の中に。ひどいのがいるんだ、この中に。

18 **翌日パウロ我らと共にヤコブの許に往きしに、**

キリストの弟です、この「ヤコブ」は。

長老たち皆あつまり居たり。

「長老たち」とは、他のヤコブ、ペテロなど。

19 **パウロその安否を問いて後、おのが勤労によりて異邦人のうちに、神の行**
い給いしことを、一々告げたれば、20彼ら聞きて神を崇め、またパウロに言
う『兄弟よ、なんじの見る如くユダヤ人のうち、信者となりたるもの数万人
あり、

「数万人」という言い方は、ちょっとオーバーかも知れないけれども、とにかく、万を越える人がいたことは事実らしい。これは、もうペンテコステでみんなひっくり返っていますから。ペンテコステでひっくり返りながら、本当に福音を受けているのは、やっぱり少数なんです。

聖霊のバプテスマを受けて、非常に喜んで、ある次元になるけれども、後の大事なことは、キリストの御言、聖書の言葉をよく化体すること、身体に化すること。とにかく、聖書の言葉をしっかりと――ただ言葉面ではないですよ、本当の意味で言葉の現実を――それを本当に身に付けることが大事なんです。そうでないと、あぶないです。

聖霊と御言とは離すことができない。霊と言は。「言霊」とも言うけれども。言の中には霊がなくてはダメ。霊はまた言によって、ちゃんと内容を持っていなくてはいかん。だから、聖書の言は正に「霊言」なんです。単なる霊でもないし、単なる言でもない。そのことは、聖霊を受けるとよく分かる。そうでないと、観念信仰でね、もう観念信仰がたくさんあるわけだ。言葉にただ捕らわれている。

みな律法に対して熱心なる者なり。

これが困るんだよな、「律法に対して熱心」というやつは。ユダヤ人は全く律法に対して熱心だ。今のユダヤ人もそうです。大体、旧約聖書のことを一番簡単に言うときには、「トーラー」「律法」というのだから。少し詳しくて、「トーラー・ウー・ネビーム」「律法と預言者」という。はっきり言うと

「律法と預言者と諸書」

という。詩篇、箴言、伝道の書、雅歌書とかいうのが「諸書」です。だから、ユダヤ人は「聖書」なんて言わない。「トーラー・ネビーム」或はただ「トーラー」と言っている。それくらい捕らわれている。その「トーラー」を乗り越えたのが、キリストです。だから、キリストは嫌われたんだ。そんなものにこだっわてないから。神さまの御言を直接受けて、動いていた霊止（ひと）、モーセを越えているひとだから。

「お前たちは、モーセ、モーセと言っているけれども」

と。キリストは独りぼっちだったわけですよね。まぁしかし、大変な方です、キリストというひとは。

●聖書は大ドラマ

聖書はどんなドラマや小説よりも凄いですよ、内容は。聖書は、そういう意味で面白くならなければウソなんだ――「面白い」という言葉はおかしいけれども――だから私は、

「聖書は大ドラマである」

と書いた。偉大な文学は、全部、聖書が基です。

21 **彼らは、汝が異邦人のうちに居る凡てのユダヤ人に対（むか）いて、その兒（こ）らに割礼を施すな、習慣（ならわし）に従うなと云いて、モーセに遠ざかることを教うと聞けり。**

「とんでもない奴だ、あいつは、もう生かすわけにいかん」

と言って、ユダヤ教のご連中はいきりたっているわけです。ステパノはそれで殺されたんだからね。

「汝らは聖霊に逆らう」

と、ステパノははっきり言ったものだから。そのステパノを殺すのをよしとしたのが、今、彼らと戦っているこのパウロさんだからね。パウロはステパノの死を本当に無駄にしなかった。

「ステパノは大変な人だった、俺はステパノの後を行くんだ」

と、こういうわけですね。

先駆者というのは偉いんですよ。宗教改革者マルチン・ルターの先駆者はフスという。これも焼かれた人だ。火刑に処せられた。天国で特別な地位にあるのは、そういう先駆者だね。

22 **如何にすべきか、彼らは必ず汝の来りたるを聞かん。** 23 **されば汝われらの言う如くせよ、我らの中に誓願あるもの四人あり、** 24 **汝かれらと組みて之ともに潔（きよめ）をなし、彼等のために費（ついえ）を出して髪を剃らしめよ。さらば人々みな汝につきて聞きたることの虚偽（いつわり）にして、汝も律法を守りて正しく歩み居ることを知らん。**

「まぁ、そういうようにしなさい。そうすれば、お前はとっ捕まらないぞ」

というようなわけです。

25異邦人の信者となりたる者につきては、我ら既に書き贈りて、偶像に献げたる物と、血と、絞殺したる物と、淫行とに遠ざかるべき事を定めたり』
26ここにパウロその人々と組みて、次の日ともどもに潔をなして宮に入り、潔の期満ちて各人のために献物をささぐべき日を告げたり。

ところが、パウロは、もちろんそれに従ったわけではない。

27斯て七日の終らんとする時、アジヤより来りしユダヤ人ら、宮の内にパウロの居るを見て群衆を騒がし、かれに手をかけ、叫びて言う、28『イスラエルの人々助けよ、この人はいたる処にて民と律法と此の所とに悖れることを人々に教うる者なり。然のみならずギリシヤ人を宮に率き入れて此の聖なる所をも汚したり』29かれら曩にエペソ人トロピモが、パウロとともに市中にいたるを見て、パウロ之を宮に牽き入れしと思いしなり。30ここに市中みな騒ぎたち、民ども馳せ集まり、パウロを捕えて宮の外に曳出せり、宮の中では、殺すわけにいかない。血で汚してはいけないというわけです。みんな、宮の外で殺す。キリストもそうです。ステパノもそう。門の外に出すんです。ヘブル書にも書いてあるとおり。

斯て門は直ちに鎖されたり。31彼らパウロを殺さんと為しとき、軍隊の千卒長に、エルサレム中さわぎ立てりとの事きこえたれば、32かれ速かに兵卒および百卒長らを率いて馳せ下る。かれら千卒長と兵卒とを見て、パウロを打つことを止む。33千卒長、近よりてパウロを執え、命じて二つの鎖にて繋がせ、その何人なるか、何事をなしたるかを尋ぬるに、34群衆の中にて或者はこの事を、或者はかの事を呼ばわり、騒乱のために確かなる事を知るに由なく、命じて陣営に曳き来らしめたり。35階段に至れるに、群衆の手暴きによりて、兵卒パウロを負いたり。36これ群れる民ども『彼を除け』と叫びつつ随い迫れる故なり。

37パウロ陣営に曳き入れられんと為るとき、千卒長に言う『われ汝に語りて可きか』かれ言う『なんじギリシヤ語を知るか。38汝はかのエジプト人にして、さきに乱を起こして四千人の刺客を荒野に率い出でし者ならずや』
39パウロ言う『我はキリキヤなるタルソのユダヤ人、卑しからぬ市の市民なり。「卑しからぬ市」というのはローマのことです。「ローマ市民」と言うと、みな恐れるわけです。うっかり手をつけられない。だから、パウロはここで、ローマ市民ということを言っては、難を逃れていたわけです。期がまだ早すぎるからね。

請う民に語るを許せ』40之を許したれば、パウロ階段の上に立ち、民に対いて手を揺し、大いに静まれる時、ヘブルの語にて語りて言う、

●パウロの弁明

22章は、今日のお話の中心になりますけれども、これは、9章、22章、26章で、3回パウロは証言しているわけです。特に、パウロはここでも「弁明」と書いてある。

1 **『兄弟たちよ親たちよ、今なんじらに対する弁明を聴け』**

「弁明」というのは「アポロギア」という「アポ　ロゴス」という字から来る。「それに対するところの言葉」という意味です。「アポロギア」を聞きなさいと。

2 **人々そのヘブルの語を語るを聞きてますます静かになりたれば、又いう、**

3 **『我はユダヤ人にてキリキヤのタルソに生まれしが、此の都にて育てられ、**

ガマリエルの足下にて

ガマリエルは有名な先生ですね、なかなか分けの分かっている人です。

「キリストの弟子たちがいろんな事を言っているが、もし彼らの言葉が神から来ているのだったら、お前たちは逆らってもダメだぞ」

と、そんなことを言ったのはガマリエルだ。ガマリエルは福音を受けとっているのではないけれども、ちゃんと、そういう認識のできる人だった。

先祖たちの律法の厳しき方に遵(したが)いて教えられ、

「律法の厳しき方」とはパリサイです。パリサイ達は律法をよく勉強し、また、律法に従ってよく実践する者がパリサイです。「分かたれたる者」という意味です。他からは区別された特別な人種だと。そして、自分達を偉がるから、とんでもない。それを「パリサイ精神」というんだ、自己義認、他を見下すのが。人をすぐ批判して、己をよしとするのを「パリサイ」という。

今日の汝らのごとく神に対して熱心なる者なりき。

「神に対しての熱心は、本当はいけないんだ」

ということを、パウロはロマ書の中で言っている。「神にあっての」「御霊に於ける」熱心ならいいけれども、自分本位の「神に対する熱心」なんてものはあぶない、と。「神に対する」、或は「律法に対する熱心」はみんな間違っている。ユダヤ人は律法に対する熱心だからね。

「あの人は熱心だ」

なんて、あぶないです、いわゆる「熱心」というやつは。キリストに圧倒されているのならいいよ。キリストに圧倒されて、その力が、その熱が動いているのならいいけれども、キリストから来ている熱でなくて、自分の熱でもって動いて、いわゆる「熱っぽく」なったら、こういう熱心はあぶないんだ。中国へ行くと、よく、「熱烈歓迎」なんて書いてあるよな。妙な書き方をするね、中国人は。

「あなた方を大いに歓迎します」

ということを「熱烈歓迎」なんて書いてある。

4 **我この道を迫害し男女を縛りて獄に入れ、死にまで至らしめしことは、**

「そういう悪い事を私はしたんだ、死にまで到らしめた、実は俺は殺人犯だ」と、パウロははっきり言っているんだ。だから、彼は

「**罪びとの首**（かしら）」

なんて言っている。第一、ステパノを殺してしまったし。

「本当はとんでもない大間違いをしていたんだ、お前さんたちの間違いの筆頭は私なんだよ」

と、こういうわけなんだ。

こういうようなことが書いてあっても、今のユダヤ人は、こんなものを読んでも、

「パウロは間違っていた」

と、やっているんだから、あきれてしまうよな。「イスラエル、イスラエル」と、よく言うけれども、困ったイスラエルだよ。

●大いなる光の霊撃

5 **大祭司も凡ての長老も我に就きて証するなり。我は彼等より兄弟たちへの書を受けて、ダマスコに寓**（やど）**り居る者どもを縛り、エルサレムに曳き来りて罰を受けしめんとて彼処にゆけり。**6 **往きてダマスコに近づきたるに、正午ごろ忽**（たちま）**ち大いなる光、天より出でて我を環**（めぐ）**り照せり。**

大変なもんだ。これは日光の光と違う。別な光、神の霊光だ。

私も、そうだな、今までにそういう式の光を二度くらい見たかな、聖霊を受けた後でね。私の周りが光っていたそうだよ。

7 **その時われ地に倒れ、かつ我に語りて「サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか」という声を聞き、**

後で祈った時に私も倒れたです。まず、霊に打たれて、身体がちょっと浮き上がったね、坐っていたのに。そして、ドカンと落ちて倒れて、全身が痺れてしまった。まぁ、凄かったな、本当に。これは考えられないです、聖霊のバプテスマは。帰りの汽車の中で聖書を見たら、聖書のベールが取れていた。

「なるほど聖書は聖霊を受けなければ読めない本だ」

ということが分かった。

無教会は、「聖書研究会」なんかやっているんだよ、一生懸命で。

「ギリシヤ語だ、ヘブライ語だ」

と言って、女の人まで一生懸命でやっているんだ、みんな。私もヘブライ語のクラスを持たされて、3年間も教えた。そんなことしてただ語学が少しできて、少し聖書が読める、なんていったって、ダメなんだ、それでは。悪くはないけれども、そんなのは第二義、第三義的な事で、第一義は聖霊の光で読まなければダメです。

「ギリシヤ語やヘブライ語が分かる人の方が、聖書がよりよく分かります」なんて、冗談言うなと。何語だって構わない。ギリシヤ語でもヘブライ語でもない。その奥の神の根源語というものがある。その響きが伝わってくるような読み方をしなければダメだというんだ。

天から光がきてしまって、自分をめぐり照らして、地にぶっ倒れてしまった。

8 **「主よ、なんじは誰ぞ」と答えしに「われは汝が迫害するナザレのイエスなり」と言い給えり。**

9章と22章と26章は、言葉面はチョコチョコ違いますよ。違ったって構わない、そんなことは。内容を説明するのに、この時はこの言葉を使うという事はあるんでね。

「言葉が違うからどっちが本当か」

と、そういう判断の仕方をしたらダメですよ。表現というものは、その時の表現というものはいろいろ出てくる。けれども、その表現されている内容をつかまなければ。その内容からその表現がいろいろに出てくるだけのはなしなんだ。

「どっちが本当か」

と、すぐそういう事を言うんだね、いわゆる批評する連中は。「どっちが本当か」ではない。どっちも本当なんだ。

参ったね、復活のキリストにこう言われてしまったら。そういう現実が、本当の根源現実なんです。相対現実ではない。こういう根源的な現実にぶつかると、とにかく、「主よ」と言ったんだ、彼は。

●聖霊のバプテスマ

9 **偕に居る者ども光は見しが、我に語る者の声は聞かざりき。**10 **われ復いう「主よ、我なにを為すべきか」主いい給う「起(た)ちてダマスコに往け、なんじの為すべき定まりたる事は彼処にて悉(ことごと)く告げらるべし」**11 **我は、かの光の晃耀(かがやき)にて目見えずなりたれば、**

目が見えなくなった、耳が聞こえなくなった、口が言えなくなった、とこういうわけですよ。だから、今度は手を引かれて行くんです。

偕における者に手を引かれてダマスコに入りたり。12 **ここに律法に拠れる敬虔の人にして其の町に住む凡てのユダヤ人に令聞(よきききこえ)あるアナニヤという者あり。**13 **彼われに来り傍らに立ちて「兄弟サウロよ、見ることを得よ」と言いたれば、その時、仰ぎて彼を見たり。**

ここで、

「鱗の如きもの落ちたり」

と、前の方で書いてあるでしょ。ここには書いてない。アナニヤは聖霊の器だ。

「兄弟サウロよ、見ることを得よ」

という、この言葉は既に霊的な言葉ですから、見えてしまうんだ。ペテロが、

「立ちて、歩め」

と言えば、生まれつきの跛者が立ってしまう。その人の、これから受けとる現実を、現在として語る。信仰の世界はそういうんです。全部、現在化するんです。

「永遠」というと、何か時間の永いことだと思うけれども、そうじゃない。「永遠」というのは「絶対に滅びない」ことなんです。「永遠の生命」というのは、ただ時間的に永いんじゃない、滅びない生命なんです。「永遠」という質は何かというと、「不滅」だということ。我々は、キリストを受けとると、この不滅の生命、永遠の生命が入ってくる。

この間、昔のＰＴＡ会長だった人が死んだという喪中のハガキをもらった。私はその息子さんに書いた。

「お父さんは死んでいませんよ。向こう側に往っただけです。文字通り、往きて生きる、往生です。悲しみは悲しみでしょうけれども、来年は湿っぽい年だと思って迎えてはダメですよ。謹賀新年ですよ。天界のお父さんと進んでください」

と、そんなことを言うやつはいないだろうな。

死に負けてはダメですよ、我々の現実は。いいですね。キリストを受けとっていて、湿っぽいようなことではしょうがないもんね、クリスチャンが。

パウロは、これで、目が覚めた。本当の心眼が、霊眼がきてしまった。ガラリ変わってしまった。

14 **かれ又いう「我らの先祖の神は、なんじを選びて御意を知らしめ、又かの義人（キリスト）を見、その御口の声を聞かしめんと為給えり。** 15 **これは汝の見聞したる事につきて、凡ての人に対し彼の証人とならん為なり。**

だから、キリストはお前を、最もキリストに逆らっていたお前をひっくり返したんだと。己の熱心を捨てて、今度は、キリストの熱心が入ってくる。それだから、この後のパウロの三つの伝道も、大変な艱難の所を突破できたのは、全く聖霊の力ですからね。

16 **今なんぞ躊躇（ためら）うか、起（た）て、その御名を呼び、バプテスマを受けて汝の罪を洗い去れ」**

これは、もちろん聖霊のバプテスマです。水のバプテスマではない。

洗礼のヨハネは、

「私よりか後に来る人は、水のバプテスマではない――私は水のバプテスマで悔改をお前たちに言うんだけれども――あの人は火と聖霊でバプテスマをするひとだ」

と言った。ところが、地上でもって、御霊のバプテスマをキリストはなさらなかった。十字架にかかって、罪の贖いをしなければ、聖霊は来ない。だから、「自分の受けるバプテスマ」というのは十字架のことです。

「十字架を通らなければ、このバプテスマを通らなければ、お前たちに聖霊を与えるわけにいかないんだ」

と、はっきり言っているんだからね、キリストが。ルカ伝の12章49、50節は非常に大事な言葉です。こういう明々白々なことを、今のキリスト教界はいい加減なんだよな。だから、いつまでたっても、聖霊がやってこない。ただ「十字架、十字架」と言っている。

「我キリストと共に十字架されたり。もはや我生くるにあらず。キリストわがうちにありて生き給うなり」

とは何ですか。

「キリストの御霊が、御霊のキリストがわが中に」

と。十字架と聖霊の事態をパウロはあのガラテヤ書2章20節ではっきり言っている。

パウロさんというのは、大変な器です。新約聖書の大事なところは皆パウロだからね。そいつをひっくり返して救ったのが、キリストなんだから。イエス・キリストはもう桁が違う、比較にならんです、これぱっかりは。そういうキリストということに驚嘆しませんか、みなさん。今のクリスチャンは驚嘆してないんだよな、キリストに、本当に。圧倒されていないんだ。だから、いつまでたっても始まらない。

●異邦伝道

17斯て我エルサレムに帰り、宮にて祈りおるとき、我を忘れし心地して主を見奉るに、我に斯く言い給う、18「なんじ急げ、早くエルサレムを去れ、人々われに係る汝の証を受けぬ故なり」

キリストが現れた。

「受けない奴らの所にいつまでも居るな」

と。愉快だね、このキリストの言葉は。

「ぐずぐずしているな、急げ」

だってさ。

19我いう「主よ、我さきに汝を信ずる者を獄に入れ、諸会堂にて之を打ち、20又なんじの証人ステパノの血の流されしとき、我もその傍らに立ちて之を可(よ)しとし、殺す者どもの衣を守りしことは、彼らの知る所なり」21われに言い給う「往け、我なんじを遠く異邦人に遣すなり」と』

「そんな事、ブツブツ言うな、過去のことはいいよ。殺人犯でも何でもいいから、今度は本当に活人に、人を活かす人になれ」

と。活人の人になれと。人殺しの剣でなくて、今度は人を活かす剣になれと。

「御霊の剣」

という言葉があるものだから、パウロの絵を書く時に、レンブラントあたりはパウロが剣

を持っている絵を書く。あれは何もパウロは剣を持っていたのではなくて、御霊の象徴なんです。御霊、御言の象徴。エペソ書の言葉から来ている。

まずこういう、キリストとの問答は凄いね。

「グズグズするな、異邦伝道をしろ」

と。それで、パウロが三回の伝道をやったわけですよ。このキリストの言葉に圧(お)されて。

22人々きき居たりしが此の言に及び、声を揚げて言う『斯のごとき者をば地より除け、生かしおくべき者ならず』23斯く叫びつつ其の衣を脱ぎすて、塵を空中に撒きたれば、24千卒長、人々が何故パウロにむかいて斯く叫び呼ばわるかを知らんとし、鞭(むちう)ち訊(しら)ぶることを命じて、彼を陣営に曳き入れしむ。

千卒長なんてのは、律法と福音との戦いなんて事は分からないものだからね。

25革鞭(かわむち)をあてんとてパウロを引き張りし時、かれ傍らに立つ百卒長に言う『ロマ人たる者を罪も定めずして鞭つは可(よ)きか』

これはパウロの言葉ですよ。

「私はローマ人なんだ、それを罪も定めなくて鞭打っていいのか」

と。これを聞いてびっくりしてしまった。

26百卒長これを聞きて千卒長に往き、告げて言う『なんじ何をなさんとするか、此の人はロマ人なり』27千卒長、きたりて言う『なんじはロマ人なるか、我に告げよ』かれ言う『然り』28千卒長こたう『我は多くの金をもて此の民籍を得たり』パウロ言う『我は生まれながらなり』29ここに訊(しら)べんとせし者どもは直ちに去り、千卒長はそのロマ人なるを知り、之を縛りしことを懼れたり。

30明くる日、千卒長かれが何故ユダヤ人に訴えられしか、確なる事を知らんと欲して彼の縛(なわめ)を解き、命じて祭司長らと全議会とを呼び集め、パウロを曳き出して其の前に立たしめたり。

●議会での弁明

23章です。

1パウロ議会に目を注ぎて言う『兄弟たちよ、我は今日に至るまで事毎に良心に従いて神に事(つか)えたり』2大祭司アナニヤ傍らに立つ者どもに、彼の口を撃つことを命ず。3ここにパウロ言う『白く塗りたる壁よ、

「お前さんなんかは、内側は汚いくせに、外側は白く塗った墓みたいなやつだ」

と、キリストの言葉から来ているね、これ。マタイ伝の23章で、

「わざわいなるかな……」

とキリストが言っている。

神なんじを撃ち給わん、なんじ律法によりて我を審くために坐しながら、律

法に悖りて我を撃つことを命ずるか』4傍らに立つ者いう『なんじ神の大祭司を罵るか』5パウロ言う『兄弟たちよ、我その大祭司たることを知らざりき。録して「なんじの民の司をそしる可からず」とあればなり』

すると、今度は、パリサイとサドカイで喧嘩が始まる。パリサイはキリストの復活を信ずる。天使も信ずる。サドカイは信じない。だから、パウロはパリサイの方の、信ずる方になる。

「これをやっつけるか、やっつけないか」

と言って、パリサイ派とサドカイ派がここでパウロを中心にゴタゴタ言いだすわけだ。

6斯てパウロ、その一部はサドカイ人、その一部はパリサイ人たるを知りて、議会のうちに呼ばわりて言う『兄弟たちよ、我はパリサイ人にしてパリサイ人の子なり、我は死人の甦えることの希望につきて審かるるなり』7斯く言いしに因りて、パリサイ人とサドカイ人との間に紛争おこりて、会衆相分れたり。8サドカイ人は復活もなく御使も霊もなしと言い、パリサイ人は両ながらありと云う。

だから、これが喧嘩になる。サドカイというのはいわゆる文化人だ。政治的な人間が多い。

9遂に大いなる喧騒となりてパリサイ人の中の学者数人、たちて争いて言う『われら此の人に悪しき事あるを見ず、もし霊または御使、かれに語りたるならば如何』

「そうならば、しょうがないじゃないか」と。

●ローマへ護送

10紛争いよいよ激しく為りたれば、千卒長、パウロの彼らに引き裂かれんことを恐れ、兵卒どもに命じて下りゆかしめ、彼らの中より引取りて陣営に連れ来らしめたり。

11その夜、主パウロの傍らに立ちて言い給う『雄々しかれ、汝エルサレムにて我につきて証をなしたる如く、ロマにても証をなすべし

最後の旅は、今度はローマへの旅になるからね。

「ローマでも最後の証をしろ」

と。パウロは、ローマよりかもっと西の方へ、イスパニヤの方まで行こうとしていた。それがとうとうできなかった。

12夜明になりてユダヤ人、徒党を組み、盟約を立てて、パウロを殺すまでは飲食せじと言う。13この徒党を結びたる者は四十人余なり。14彼らは祭司長・長老らに往きて言う『われらパウロを殺すまでは何をも味うまじと堅く盟約を立てたり。15されば汝等なお詳細に訊べんとする状して、彼を汝らの許に連れ下らすことを議会とともに千卒長に訴えよ。我等その近くならぬ間に

殺す準備(そなえ)をなせり』

「早いところ、やっつけてしまおう」

と、そんなことを議論しているものだから、その事をひそかに聞いていた、

16**パウロの姉妹の子この待伏の事をきき、往きて陣営に入り、パウロに告げたれば、**17**パウロ百卒長の一人を呼びて言う『この若者を千卒長につれ往け、告ぐる事あり』**18**百卒長これを携え、千卒長に至りて言う『囚人(めしうど)パウロ、我を呼びて、この若者なんじに言うべき事ありとて、汝に連れ往くことを請(こ)えり』**19**千卒長その手を執り退きて、私(ひそか)に問う『われに告ぐる事とは何ぞ』**20**若者いう『ユダヤ人は汝がパウロの事をなお詳細(つまびらか)に訊(しら)ぶる為にとて明日かれを議会に連れ下ることを汝に請わんと、申し合わせたり。**21**汝その請(こい)に従うな、彼らの中にて四十人余の者、パウロを待伏せ、之を殺すまでは飲食せじと盟約を立て、今その準備をなして汝の許諾(ゆるし)を待てり』**22**ここに千卒長、若者に『これらの事を我に訴えたりと誰にも語るな』と命じて帰せり。**23**さて百卒長を両三人よびて言う『今夜、九時ごろカイザリヤに向けて往くために、兵卒二百、騎兵七十、槍をとる者二百を整えよ』**24**また畜(けもの)を備え、パウロを乗せて安全に総督ペリクスの許に護送することを命じ、**25**かつ左のごとき書(ふみ)をかき贈る。

26**『クラウデオ・ルシヤ謹みて総督ペリクス閣下の平安を祈る。**27**この人はユダヤ人に捕えられて殺されんとせしを、我そのロマ人なるを聞き、兵卒どもを率い往きて救えり。**28**ユダヤ人の彼を訴うる理由を知らんと欲して、その議会に引き往きたるに、**29**彼らの律法の問題につき訴えられたるにて、死もしくは縛(なわめ)に当たる罪の訴訟(うったえ)にあらざるを知りたり。**30**又この人を害せんとする謀計(はかりごと)ありと我に聞こえたれば、われ俄(にわか)にこれを汝のもとに送り、これを訴うる者に、なんじの前にて彼を訴えんことを命じたり』**

31**ここに兵卒ども命ぜられたる如くパウロを受けとりて、夜中アンテパトリスまで連れゆき、**32**翌日これを騎兵に委ね、ともに往かしめて陣営に帰れり。**33**騎兵はカイザリヤに入り、総督に書をわたし、パウロを其の前に立たしむ。**34**総督、書(ふみ)を読みて、パウロのいずこの国の者なるかを問い、そのキリキヤ人なるを知りて、**35**『汝を訴うる者の来らんとき、尚つまびらかに汝のことを聴かん』と言い、かつ命じて、ヘロデの官邸に之を守らしめたり。**

●天国は幼児のごとき者の国

それで、一応終わったんですが、幼児(おさなご)の按手をしてあげるので、その前に聖書を読みます。祈りの時に按手をしてあげます。マタイ伝18章、

「1**そのとき弟子たち、イエスに来りて言う『しからば天国にて大いなるは誰か』**
2**イエス幼児（おさなご）を呼び、彼らの中に置きて言い給う、**3**『まことに汝らに告ぐ、もし汝ら翻えりて幼児の如くならずば、天国に入るを得じ。**4**されば誰にても此の幼児のごとく己を卑（ひく）うする者は、これ天国にて大いなる者なり。**5**また我が名のために、斯（かく）のごとき一人の幼児を受くる者は、我を受くるなり。』（マタイ18・1～5）**

非常に強い言葉です。幼児は本当に純真な、いわゆる善悪の彼岸というような事態です。老子の言葉にこういうのがあるでしょ。

「大道廃れて仁義あり」

と。老子の「道」は「無道の道」なんだ、大道。大道が廃れたものだから、仁だの義だの、愛だの義だのと言っていると。私は、あの言葉を読んだ時にびっくりした。やっぱり凄いなぁ、と思った。普通なら、「仁義」ということは第一の大事な徳目と、或は実存の中心と思うでしょ。ところが、老子は、

「大道が廃れたものだから仁だの義だのと言っているが、ダメだぞ」

と。そこまでいかないと、本当の世界ではないんだ。だから、

「善だ悪だなんて言っているうちはダメだ、本当の世界はそんな区別をしている相対的な世界ではない、それが幼児の世界なんだ」

と。幼児は無心で、全身でもって動いている、笑うのも泣くのも。だから、

「翻りて、お前たちは幼児（おさなご）の如くならなければ」

と、キリストはおっしゃった。偉大な人間は童心をもっている、幼児の心を。童心をもたない者は、本当の偉大さになれない。キリストが最大の童心をもっている。だから、こういうことを仰る。キリストは、自分が本当の幼児だから、「父よ」と言って、

「お父さん、私は何も分かりません、何もできません。あなたのする通りに、言うとおりにやります。あなたの力をください。それで動きます」

と。幼児なんだ、キリストは。彼は無力なんだ。無力、無言、無善。だから、私はキリストのことを

「無者」

という。無者ということは本当の幼児ということ。

今の政治家なんてどこに童心があるかと思う。政治家の胸の中は、顕微鏡で見たって、童心なんかでてこない――冗談な言い方だけれども――とんでもないよ、全く。童心のないもので動かされている日本人なんて、情けなくなるね、正直。皆さん、周りがどうでもいいよ、我々は本当にキリスト直結で、孔子が、

「千万人といえども我往かん」

と言ったけれども。千万人と言えども我往かんと言える。男でも女でも、魂の奥底は、そ

れでなければダメです。それが本当の童心の世界なんです。童心の世界に入ると、恐いものはなくなる。小さい人は何も恐くないんだよな。だから、

「天国で大きいのは幼児だ」

と。いわゆる偉人ではないぞと。こんなことは旧約聖書にはないんだ。キリストでなければ言えない。旧約にちょっと似た言葉もないことはないけれども。

「3『**まことに汝らに告ぐ、もし汝ら翻えりて幼児の如くならずば、天国に入るを得じ。4されば誰にても此の幼児のごとく己を卑うする者は、これ天国にて大いなる者なり。5また我が名のために、斯のごとき一人の幼児を受くる者は、我を受くるなり。**』（マタイ18・3～5）

「幼児のごとく己を卑うする者」とは、自分を何ものともしないこと。

「私と幼児は一つだよ、だから、幼児を受けることは私を受けることだよ」

と。こういうキリストの言葉は楽しくないですか。私は楽しくてしょうがない。

みんな、あんまり畏まっているから、しょうがないよ。畏まらないでください。「ああ、そうです」と。福音の世界は歓びの世界だから。楽しい世界だ。本当のエピクレアン、本当の楽しみの哲学、これは本当は福音なんだ。だから、「喜びの音信」という。ギリシヤ哲学の、いわゆるエピクロスよりか、もうひとつ次元が違った楽しみなんだ。

マタイ伝18章の10節に、

「10**汝ら慎みて此の小き者の一人をも侮るな、我なんじらに告ぐ、彼らの御使たちは天にありて、天にいます我が父の御顔を常に見るなり。**」（マタイ18・10）

「天使が見ているんだぞ、幼児には天使が守っているんだぞ」

と。キリストは、いい加減なことを言っているのではない。これは本当なんだから。「守り神」なんて言う人があるね。神さまの使いとして守っている。

「13**ここに人々イエスの手をおきて祈り給わんことを望みて、幼児らを連れ来りしに、弟子たち禁めたれば、14イエス言いたもう『幼児らを許せ、我に来るを止むな、天国は斯のごとき者の国なり』15斯て手を彼らの上におきて此処を去り給えり。**」（マタイ19・13～15）

この弟子たちはダメだ、童心を持たないものだから。

「お前たち、幼児を連れて来たのに、なんだって、止せなんて言うか」と。

「斯て手を彼らの上におきて此処を去り給えり」

キリストの按手です。

使徒行伝のパウロと、マタイ伝の18、19章の所を済みましたので、これから、祈りに入ります。その時に按手して上げます。